

「好きになることはない」と言った冷たい夫に『優しくなるお薬』を飲ませたら、勘違いと独占欲が爆発して朝まで孕ませ溺愛執着プレイで愛を叩き込まれました。

サンプル（一部抜粋）

「俺がお前を好きになることはない。」

結婚2ヵ月目に夫から言われた酷い言葉。

「……」

言葉を返す事も出来ず、私はただ俯く。

それなら結婚なんて断れば良かったのに。

この結婚はそもそも、親が決めた結婚だった。

実家の事業が傾き始めた時になんとか契約にこぎつけた、大手の取引先。

ただ…いつ契約を切られてもおかしくなくらい、危うい状況だったらしい。

お父さんは、この契約だけは死守しなければいけないと思って…色々と考えたらしい。

私には何も言わず。

ごまをすって、大手の取引先の息子さんとの縁談にこぎつけたんだとか。
よく分からないけれど、相手も私の写真を見て受け入れたって聞かされた。

それを知ったのは…結婚前夜だった。

(中略)

やってられないな。

私はそう思いながらスマホを取り出す。

こういう時はやっぱり…裕太に連絡だよな。

裕太とは幼稚園の時から幼馴染で、姉弟のような関係というか、性別を超えた友達だった。
ブルブル…と数回コール音が鳴ったあと、裕太の声が聞こえる。

「もしもし！」

「あ、裕太、聞いて！」

私明日結婚することになったんだけど。」

「え、は!？」

まって、脈絡が無さ過ぎて理解できないんだけどw」

裕太は大ニュースを聞くような感じで、興奮気味に楽しそうに私の話を聞いてくれた。

「いやあ……やばいね、さくらのお父さん。」

「でしょ？」

私達、まだ22歳だよ。こんな早く結婚するなんて思ってたし、相手、35歳だよ……。」

「まあ、でも……さくらなら、なんとかなりそうな気がするな。」

裕太はゲラゲラと笑いながら、根拠の無い事を言う。

「もう、他人事だと思って適当な事言わないでよ……」

「ごめんって！」

でもさくらの写真を見て、相手が了承したなら……めっちゃくちゃ大切にしてもらえるかもじゃん？
見た目が好みだったってことなんだから！」

（中略）

「……なんだ？」

「あの！」

「……うん？」

「えっと……ご、ご飯でもいいかですか？」

何か作ろうと思って……」

「……仕事で忙しいんだ。放っておいてくれ。」

湊さんは無表情のまま淡々とそう言うのと、そっと私の肩を押してドアを閉めてしまった。

「……」

照れてる…のかなあ。

それか単純に感情の起伏がないだけ？

仲良くなりたいのに……。

（中略）

そう思いながらただ日常を重ねていたけれど、そんなある日

「湊さん。良かったら今日、一緒に外食でも…しませんか？」

と誘った事があった。

「……外食……？」

「はい！美味しいお店があるって聞いて……」

「……誰に？」

「え？誰について……友達、ですけど……」

そう答えた瞬間、湊さんの瞳がフツと暗くなったような気がした。

「……あの……？」

「…どうしてそんなに、俺の機嫌を取ってくる？」

「え……？」

「なんでそんなに俺に歩み寄ろうとしてくる？」

湊さんが一歩、私に近寄ってくる。

「っ……」

距離がいつもより近い……。

なにか……怒ってる……？眉間に刻まれた深い皺。冷たく冷酷に見下ろす瞳……。

「仲良く………したい………なんです………」

圧倒的な威圧感に、肌がピリピリとしびれるような感覚がする。

「……仲良く………？」

「せっかく夫婦になつたし……だからその………」

威圧感に気圧されながらだけど……私は自分の望みを口にした。

「………」

湊さんは怒った表情のまま、私の顔を覗き込み、ぐっと顔を近づけてくる。

「っ……！」

身体がビクッとして、恐怖で硬直する……。

キス……される……？

まだ会話すらもちゃんと出来ていないのに……今は嫌………。

私はフツと視線をそらし、湊さんにキスをされないように横を向いた。

だけどその瞬間

「……はあ……」

と大きなため息が聞こえてきた。

そして大きな手で私の顎をぐつと掴まれ、湊さんへと視線を強制的に戻される。

「や……まって……っ……」

「勘違いするな。安心しろ。」

俺がお前を好きになることはない。」

淡々と冷たく吐かれる言葉。

ズキズキと心が痛む。これは失恋だとか、そういう話ではない。

仮にも夫婦になったのに、歩み寄ろうと頑張って来たのに……それを全て拒絶された悲しみだった。

（中略）

料理に垂らせばいいんだよね。

とはいえ、ほんとにこんなの使っていないのかなあ……。

悩みながらも、現状を少しでもよくできるなら……っと思いで、帰ってすぐにご飯を作る。

湊さんは部屋で仕事中…か。

まあ、多分効果なんてないんだろうけど、10滴くらい垂らしておくか。

私は安易な気持ちで、完成した料理に10滴ほど薬を混ぜた。
このあと、おかしなことになるなんて…想像すらせずに。

（中略）

チラッと彼の方を見ると、片手で額を押さえ、肩で息をしている…。
瞳を閉じて、何かを必死で我慢しているように見える。

「湊…さん…？」

「……頼む、部屋に戻ってくれ。」

「え…？」

「…いいから。今は近づくな。」

湊さんの言葉はいつも通り冷たいのに、その声色は妙に熱い。

薬…効いてるよね？これ…。

というか苦しそうなんだけど、大丈夫…なの？

ただ湊さんが優しくなってくれたら嬉しくて、普通に会話がしたいだけなんです…。。

（中略）

数秒の間の後

「……俺は忠告したからな……」

湊さんの低く熱い声が響く。

そして次の瞬間、湊さんの熱い手にぐっと腕を掴まれた。

「え……？」

身体がビクツツとして固まっていると、そのまま腕を引っ張られてしまった。

「きゃっ……」

そのせいで座っている彼の上へと、抱きつくように倒れ込んでしまう。

彼の荒い呼吸が、異様に熱い身体が……伝わってくる。

「湊……さん……？」

「もう我慢できない。」

湊さんは倒れ込んだ私の頬を両手で包み、目をじっと見つめてくる。

「あ、あの……？」

その目は熱く光っていて、身体はわずかに震え、熱気が立ち込めているように見える……。

そのままぐちゅっ……とキスをされた。

「ん……ん……ん……！」

間髪入れずにねじ込まれる舌。

(中略)

「湊……さん……っ、はずかしい……から……」

「……こんなにとろとろに濡らしてるくせに？」

「……っ、だから……見ないでほしい……の……に……っ……」

「……俺は見たいよ。」

さくらの全部が見たい。愛してるんだ。どうしようもないくらい……。

お前が好きだ……。

肩で息をして、苦しそうなのに、愛おしそうに大切に言葉を紡ぐ湊さん……。

胸が苦しくて、ぎゅーっと痛む……。

「湊さん………。」

もっと……愛してるって言って欲しい……。心が苦しくなって嬉しくなるから……。

そう思いながら言葉を紡ごうとしたけれど、その瞬間にクリをじゅるっ♡と激しい音を立てて吸われた。

「ああああっっ、は、あ、まって……、そこ、きもちいい……っ、だめ、あ、あ、ああ……っ……」

湊さんの口の中で、こりっ♡ぬちゅっ……♡とクリを刺激される度に、身体が熱く震えだす。きもちいい、どうしよう、頭が真っ白になって呼吸が浅くなる……。

身体の奥底から湧き上がる快感に…抗えない。

「湊…さ…んっ、お願い、イっちゃいそう…なの…っっ…」

必死でそう言っていると、湊さんの視線がゆっくりと私の瞳へと移る。

貪るようにクリを舐める彼の上目遣いがありにも妖艶で、くらくらする。

「ふう…はあ…っ、だめ、イっちゃうから、激しくしちゃ…だめっ…」

何度も息を吐いて必死で快感を逃がそうとするけど、その瞬間にぐちゅっ♡と甘い水音を立てて、中に指を入れた。

「んぐ…う、おあぁあぁあっっっ♡♡♡」

たったそれだけで私は…簡単にイカされてしまった。

(中略)

「っ…湊…さん……」

「ごめんな。」

「え？」

「もう我慢できなくて。」

ほんととはもった大切にしたいのに。もう無理なんだ。」

(孕ませ溺愛執着プレイの全容は製品版にて)